

とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

事務局（連絡先）〒277-0014 千葉県柏市東 3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会
*****天利武人（教会牧師）電話 04-7164-9159
（会報編集、ホームページの連絡先）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継
***** Eメール kmat27aiko@gmail.com 携帯電話 09061674553

☆ 第 25 号

☆2022 年（令和 4 年）
7 月 31 日 発行

★ 2022 年の茶の花忌については開催の方向

八木重吉を愛する皆様いかがお過ごしでしょうか。ここに来て再びコロナ感染者が急増して第 7 波と言われています。第 6 波の時もそうでしたが、国の対処方法は、ワクチン接種の推進も含め、感染対策を十分とりながら、出来るだけ経済活動、社会活動を制限しないという方向になって来ています。今年の茶の花忌の行事開催について、第 6 波の後に、茶の花忌準備委員会で検討され、今年は開催する方向で進めることを決定しています。この第 7 波が長く続いて想定を越えるような感染爆発になれば、もちろん急遽中止せざるを得ませんが、茶の花忌当日の 10 月 26 日まで約 3 か月ありますので、現在の時点で中止という判断は出していません。今後落ち着いた状態に変化する事を願い、皆さんには、茶の花忌の行事が 3 年ぶりに開催される方向であることを伝えておきます。

行事の内容は、昨年計画していた内容と同じです。以下の予定です。

開催日：2022 年 10 月 26 日（水）

日程：

12:30～ 墓前礼拝

牧野信次牧師による司式と感話

一中庭へ移動—

13:00～ 八木重吉を偲ぶ会

司会：青木幸雄（敬称略、以下同様）

- ・主催者挨拶（八木明男）
- ・茶の花忌準備委員長（八木幹夫）挨拶及び講演
- ・八木重吉の詩の朗読（地元のサークル）
- ・八木重吉の詩の歌唱とギター演奏（YO—EN）*PR チラシ同封してあります。
- ・来客等の紹介
- ・茶の花忌の歴史について（小林正継、〈茶の花忌の歴史概略年譜〉配布予定）



★中止になった忠生での図書館講座「ふるさとを愛した詩人八木重吉」について

2 月 25 日に予定されていた忠生図書館の図書館講座「ふるさとを愛した詩人八木重吉」は、コロナ感染者増加の時期だった為に、中止となりました。講師（小林）が予定した内容の概要（序と結論）を紹介しておきます。

- 序
- ・重吉の詩の中での「ふるさと」は単なる望郷の思いを越えて、求道の重要なテーマの一つとなっている。
- 1) ふるさとは求道詩人重吉の原体験を形成し、その原体験の世界を重吉は生涯愛し続けた。生家で過ごした尋常小学校及び高等科時代、長期休みには生家に帰省していた鎌倉師範学校時代も含めて生活を検証する。
 - 2) 大人重吉から振り返った幼少年時代の純朴な姿、子供をもって再確認した無垢な世界としてのふるさとが、重吉の求道の過程で理想的な世界としてイメージ化されて行くのを、《哀しみ》との関係で分析する。

結論

重吉は、生家（ふるさと）で暮らす中で直観した《哀しみ》を自覚し、そこから脱却するための求道の過程で、英文学学習やキリスト教信仰に進む。ふるさとの緑豊かで心を包むような日本の自然と、それを育んできた村落共同体の生活（無邪気な子供の世界）は、文学や信仰で捉えた美と真理の世界と対立しない。伝統的な日本の物悲しさの詩情と、「かなしんでいる人達は幸いである」というキリストの言葉の真理が重なり、《哀しみ》と共に歩む道の彼方に心のふるさと（天国）を展望する。この深い求道心を背景に生まれ出た短詩が重吉の詩であり、求道の真剣さゆえに鋭さも秘めつつも、心の琴線に触れて傷心の人の心をさえ癒す。重吉にとってふるさは、無垢な幼少年時代の原体験の場所であることにとどまらず、求道心が向かっていくべき天国のふるさと（理想の世界）と重なり、美しくとらえられる。重吉の詩のテーマとして重要な位置を占めていると言える。

★茶の花忌準備委員会委員長、八木幹夫氏の小文「八木重吉と加藤武雄」の紹介



上／十字の刻まれた八木家の墓石（右から重吉、桃子・陽二、登美子）。中央／重吉生家にある「素朴な琴」の詩碑。右／相模原市普門寺飯縄権現堂境内からの津久井湖眺望。



東京都 町田市相原町
～神奈川県 相模原市緑区 (旧津久井町)
文／八木幹夫 (写真／飯下明博)

八木重吉と加藤武雄

——津久井の風土が生んだ詩人と作家——

てくてくと

こどものほうへもどっていかう

（「鞠とふりきの独楽」 大正13年6月18日）

こどもが

なぜによろこんでゐるかつて？

なあんにも

あとへのこそうとしないからさ

（「み名を呼ぶ」 大正14年3月）

「あとにのこそうとするもの」など全くなかった少年時代。この詩を知ったとき、自分の不純さに気付かされた。何かを残そうとする自分がある。重吉の詩はびたりと銃口を読者のところに向けてくる。天真爛漫とはそういうことなのだ。「こどものほうへもどっていかう」、平明な言葉が一瞬、人生の本質を射抜いてくる。

明治31年、八木重吉は東京都町田市相原町大戸の農家の次男に生まれる。詩を書いていたのは24歳の頃から死去する29歳までのほぼ5年間。短い生涯ではあったが、生前に親戚筋の作家加藤武雄の尽力で『秋の腫』を刊行。死後、妻の登美子によって沢山の詩稿が保存された。

夫婦の間に生まれた桃子と陽二は、重吉の死のほぼ10年後に父と同じ肺結核で死去。戦後登美子は、歌人の吉野秀雄と再婚。

素朴な琴

この明るさのなかへ

ひとつの素朴な琴をおけば

秋の美しくさに耐へかね

琴はしづかに鳴りいだすだらう

この作品は重吉の詩の中でも有名なものだが、琴の音や光の見返りを求めない無償性が詩篇全体に漂っている。

春

ほんとによく晴れた朝だ

桃子は窓をあけて首をだし

桃ちゃん いの子 いの子うよ

桃ちゃん いの子 いの子うよつて歌

つてゐる（詩集『貧しき信徒』）

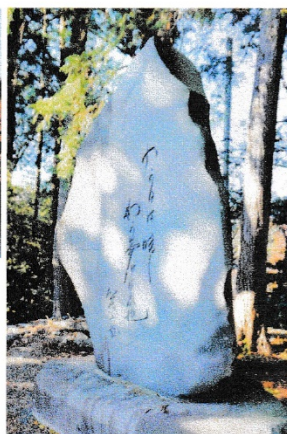
重吉の詩には子どもの生き生きとした姿のものが沢山あるが、自分を褒めるように歌っているところが春にふさわしい。

重吉の墓には最愛の妻登美子と、子どもの桃子と陽二が並ぶ。十字の刻まれた墓石の前では毎年、重吉命日の10月26日前後に「茶の花忌」が行われる。

また加藤武雄は、新潮社に務めた編集者かつ小説家。大正・昭和期のベストセラー作家として活躍。重吉の死後、詩集『貧しき信徒』の出版にも尽力した。門人に作家



上／相模原市緑区 城山湖眺望。
右／城山湖散策道にある加藤武雄の詩碑。設計は建築家の丹下健三。



佐藤愛子がいる。
山の頂上にある城山湖の静かな湖面を見下ろしつつ、武雄の「わが日は暗し わが夢ははるか也」（碑文）を復唱すると、この作家なくして津久井という風土の重吉詩もなかったのではと思えてくる。重吉のみならず、加藤武雄再評価の機運が起こることを祈らざるを得ない。

案内人

八木 幹夫：昭和22年神奈川県相模原市生まれ。現代詩花椿賞、芸術選奨文部大臣新人賞等受賞。現在日本現代詩人会会長。主な著書に詩集『野菜畑のソクラテス』、評論『渡し場にしゃがむ女—詩人西脇順三郎の魅力』等。

「イン・ザ・ストリートズ出版『たびぽえ』VOL.2 から再掲」

★ゆかりの地の最近の八木重吉（◆インターネット上で発見できる記事から紹介）

八木重吉のゆかりの各地で、現在どの程度その地域の人々に知られているか、ネットの情報だけで判断はできませんが、ネットに取り上げられていることは、重吉とのゆかりが認知され郷土の誇りとされている証拠とも言えますので、地域に開かれた情報を提供している公的機関あるいは団体組織からいくつか紹介します。ゆかりの各地域の特徴や思いが感じられるでしょうか。ゆかりの地では、いつまでも愛されていて欲しいものです。

◆ネットミュージアム兵庫文学館 ゆかりの作家一覧 八木重吉

兵庫県神戸市に居住。兵庫県ゆかりの作品に『秋の瞳』がある。明治 31 年（1898）、父・八木藤三郎、母・ツタの次男として生まれる。小学校高等科卒業後、鎌倉師範から東京高師へと進むこととなる。21 歳のときに駒込基督会で洗礼を受ける。大正 10 年（1921）、兵庫県御影師範の英語教師として赴任。翌 11 年に島田とみと結婚。このころより詩作に専念するようになる。大正 14 年（1925）、千葉県立東葛飾中学に転任するも翌 15 年に結核第二期と診断され、入院生活を余儀なくされる。この年、処女詩集『秋の瞳』を刊行。茅ヶ崎で 1 年余の闘病生活を続け、昭和 2 年（1927）10 月、死去。神戸市東灘区御影中町 5 に詩碑「夕焼」

ゆう焼をあび／手をふり／手をふり／胸にはちいさい夢をとぼし／

手をにぎりあわせてふりながら／このゆうやけをあびていたいよ

◆ちがさきナビ まち・ひと・茅ヶ崎の煌き 八木重吉

東京府南多摩郡堺村（現在の東京都町田市相原町）に生まれる。神奈川県師範学校予科（現在の横浜国立大学）を経て東京高等師範学校の英語科を卒業。英語教員を長年務めた。この神奈川県師範学校在学時より教会へ通いだすようになり、1919 年、駒込基督会において、富永徳磨牧師から洗礼を受けた。1922 年、島田とみと結婚後、詩作に精力的に打ち込み、1923 年はじめから 6 月にかけて、自家製の詩集を十数冊編むほどの多作ぶりであった。1925（大正 14 年）刊行詩集としては初となる「秋の瞳」を刊行。雑誌や新聞に詩を発表するようになったが、翌年には体調を崩し、結核と診断される。

茅ヶ崎において「東洋一」のサナトリウムと称せられた南湖院での療養生活に入り、そのため転居した茅ヶ崎の十間坂に居を構えて、第二集「貧しき信徒」を制作したものの、出版物を見る事なく、翌年 29 歳で死去した。5 年ほどの短い詩作生活の間に書かれた詩篇は 2,000 を超える。現在、茅ヶ崎市美術館前の高砂緑地には、蟲という題の詩が石に刻まれ、彼をしのんでいる。

蟲が鳴いている／いま ないておかなければ／もう駄目だというふうに鳴いている／

しぜんと／涙をさそわれる

◆柏インフォメーションセンター（Kamon） 歴史発見 柏駅周辺の歴史散歩 八木重吉詩碑（東葛高校）

東葛高校の敷地に、国道 6 号に面して八木重吉の詩碑が建てられています。八木重吉（1898～1927）は大正・昭和前期の詩人で、明治 31 年東京府南多摩郡堺町（現町田市相原町）に生まれ、東京高等師範学校英語科を卒業後、教員となります。大正 14 年（1925）、開校間もない東葛飾中学校（現東葛飾高校）に赴任し、同年『秋の瞳』を刊行。佐藤惣之助主宰の『詩の家』の同人となるなど、活躍していきます。しかし翌 15 年、結核を患い最後の授業で「キリストの再来を信ず」という言葉を残し学校から去っていきました。キリスト教詩人として業績を残した重吉は、昭和 2 年、茅ヶ崎の寓居で没しています。29 歳の若さでした。

ずいぶん／ひろい 原っぱだ／いっぽんのみちを／むしように あるいていくと／

ところが／うつくしくなつて／ひとりごとをいうのがうれしくなる

重吉が赴任した頃、このあたりには小金牧の名残の原っぱが、広がっていました。子供たちと原っぱを散歩し、自然をテーマとした美しい詩を発表していったのです。

◆西宮つーしん 西宮フォト 夙川公園にある八木重吉の詩碑「幼い日」の像

夙川公民館の横にある夙川公園（正式には夙川河川敷緑地）に、少年の像があります。私が子どもの頃からあり、当時は像に上ったり、像の頭をぺちぺちして遊んだりしていましたが、よく見ると詩が掘られています。こちらは主に大正時代に活躍し、昭和 2 年に 29 歳の若さで亡くなった詩人、八木重吉の「幼い日」という詩です。皆さんも子どもの頃には水や木の声が聴こえたのではないのでしょうか？像の隣には説明書きの石碑もありました。少し見づらいですが、幼い日の像（八木重吉の詩より）「子供の幸福をねがい」と書かれています。八木重吉は一時期関西にいた事もありましたが、西宮との直接の関わりは不明です。製作・寄贈された方々は、この詩のメッセージを後世に伝えたかったんでしょうね。



◆町田市 町田市民文学館・ことばらんど 町田ゆかりの作家たち 八木重吉

1898 年 2 月 9 日生まれ、東京府南多摩郡境村相原（現・東京都町田市相原町）出身。大戸学校（現・町田市立

相原小学校)に入学し、5年生から川尻尋常高等小学校(現・相模原市立川尻小学校)へ進学。神奈川県師範学校(現・横浜国立大学)時代に英語の勉強のため日本メソジスト鎌倉教会のバイブルクラスに通い、1919年に駒込基督会で洗礼を受けた。東京高等師範学校を卒業後、英語教員となりこの頃盛んに短歌を作る。1922年に島田とみと結婚。この頃から詩作に専念し、1925年には第1詩集『秋の瞳』を刊行した。これが縁で「詩之家」や「日本詩人」などに作品を発表したが、29歳の若さで病死。没後、生前自選の詩集『貧しき信徒』が、再従兄の作家・加藤武雄の尽力で出版された。1927年10月26日、結核のため29年の生涯を閉じた。

主な作品：『秋の瞳』(1925、新潮社) 『貧しき信徒』(1928、野菊社) 『八木重吉詩集』(1948、創元社)
『花と空と祈り』(1959、彌生書房) 『八木重吉全集』(1982、筑摩書房)

居住期間：1898年から14年間、相原に居住した。

町田との関わり：

『秋の瞳』に収められた作品や「ふるさとの川」(『貧しき信徒』所収)には、身近な町田の自然が描かれている。

当館との関わり(展覧会)：

- ・開館記念展 ことばの森の住人たち—町田ゆかりの文学者 会期：2006年10月27日から2007年3月4日
- ・ことばの森の住人たち—町田ゆかりの文学者展 会期：2010年1月31日から3月28日
- ・開館10周年記念 八木重吉 —さいわいの詩人(うたびと)—展 2016年10月22日から12月25日

刊行物：

- ・2006年度展覧会図録『ことばの森の住人たち—町田ゆかりの文学者』(2006年96ページ、有料販売)
- ・2016年度展覧会図録『八木重吉 —さいわいの詩人(うたびと)—展』(2016年72ページ、販売終了)

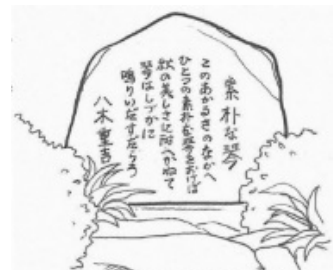
◆東京都町田市相原町 歴史と文化 八木重吉

八木重吉は明治31年(1898年)2月9日、堺村相原大戸(現 町田市相原町)に生まれました。大正6年(1917年)神奈川県師範学校から、東京高等師範学校英語科(現 筑波大学)に進み、在学中内村鑑三の著作に感化されキリスト教の洗礼を受けました。1922年卒業後、兵庫県御影師範(現 神戸大学)の英語教師となり、同年島田とみと結婚。千葉県柏の東葛飾中学校(現 東葛飾高校)に転任、病弱ながら詩作、第一詩集『秋の瞳』を刊行、大正14年(1925年)、親戚の作家であった加藤武雄の世話により、第一詩集の『秋の瞳』が新潮社より刊行されています。その後、佐藤惣之助主宰の「詩の家」の同人となり、草野心平らの『銅鑼』(どら)や『日本詩人』『生活者』等、詩誌に作品を寄せています。

1926年、結核と診断され、約1年間絶対安静の闘病生活を続けます。病の床で第二詩集『貧しき信徒』を編纂。昭和2年(1927年)10月26日、『貧しき信徒』の刊行を見ぬまま29歳で死去、郷里堺村の八木家墓地に葬られました。『貧しき信徒』は翌年、処女詩集と同じく加藤武雄の尽力によって、野菊社より出版されました。墓地には、妻子とともに葬られています。資料館があり、訪問の際には問い合わせてください。(「相原観光エリアマップ」町田市観光コンベンション協会 パンフレットより)

「茶の花忌」 町田の生んだ詩人八木重吉を偲ぶ 10月26日は相原で生まれた詩人、八木重吉の命日です。今年(2014年)は87回目の命日になります。毎年この日は全国からたくさんのファンが八木重吉記念館をおとずれ「茶の花忌」が催されます。生前クリスチャンだったこともあり讃美歌や詩の朗読などが披露され、毎年訪れる方もいらっしゃいます。

※八木重吉記念館(生家)：相原駅より大戸行きのバスで「大戸橋」バス停下車すぐそばです。(「いきいき町田21」平成26年10月1日に寄稿)



★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

(募集) 題：「八木重吉との出会いとその詩の魅力」(この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。)

字数：2000字程度(原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎)

締切：なし(随時お送りください)

送り先：メール(kmat27aiko@gmail.com)か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> (作成途中の部分があることをご了解下さい)

Eメールアドレス kmat27aiko@gmail.com (管理者小林正継)